

未来への扉 - 若者に寄り添う NPO のチャレンジ

第1部

居場所を拠点にした伴走支援



社会的孤立への処方箋として広がりを見せる居場所事業。進学や就職などの目標に向けてプログラム化された場とはちがひ、ただ「居る」だけ、時間を過ごすためだけに来ても良い自宅以外の場所はケアリーバー等の若者たちにとっても大切な場所になっています。こうした居場所は、安心して話せる、信頼できる支援者と出会うことができる場でもあります。

支援者は、メールや SNS でつながった相談者に居場所を案内することで、実際に顔を合わせ、対話をとおした関係づくりができるようになります。そして、居場所での出会い、会話を入り口に、その方に必要な具体的な支援をしていくことが一つの支援モデルになっています。

こうして若者からの信頼を得ることで、体調が悪いとき、所持金がつきそうになったとき、役所で難しい手続きをしなければならないときなど、困ったときに相談してもらい、出向いて支援することができるようになります。食べ物を届けたり、病院や役所に一緒に行ったりもします。頼れる身内がない若者たちにとって、このような具体的なサポートはとても頼りになるものです。つまり、居場所を拠点にアウトリーチ型の伴走支援につなげていくのがポイントなのです。

また、多くの若者支援団体は、若者たちにとってなじみの場所になった居場所と、仲間づくりの企画や就労につながるプログラムなどを組み合わせて伴走支援をしています。第1部ではそのうちの4つの団体を紹介します。

アウトリーチ

相談窓口での「待ち」の相談だけではサポートできない若者たちがいます。仕事を辞めてしまった、借金をつくってしまったなど、生活がうまくいっていないときこそ相談しづらいのが若者たちの心情です。そんな相談しづらさを乗り越えられる関係づくりを目的に、様々な形のアウトリーチが試みられています。なかでも、食べ物を届ける取り組みは、食べ物の好みをきいたり、感謝を伝えたりと、コミュニケーションのきっかけになるほか、手渡すために家庭訪問をする必然性をつくることもできます。

支援団体一覧（掲載順）

法人名・施設名	事業名（採択年度）	所在地 （事業実施エリア）	掲載箇所
NPO 法人 CAN ピッケノハコ	社会的孤立を防ぐ居場所事業（21年度）社会的養護出身者等の若者に対する伴走支援事業（22年度）	北海道 （札幌市周辺）	p6-9
NPO 法人チャイルドラインみやぎ	With コロナにおけるケアリーバーへの伴走型支援事業（21年度）	宮城県 （主に宮城県）	p10-13
NPO 法人どりのむスイッチ 退所児童等アフターケア事業所カモミール	つながるアウトリーチ強化プロジェクト（21年度・22年度）	広島県 （広島県）	p14-17
NPO 法人日向ぼっこ	精神的つながり構築のための食料等送付事業 - 自分らしく生きるためのサポートを通して築くつながり（22年度）	東京都 （全国）	p18-21

アパートを活用した居場所



NPO 法人 CAN 『ピッケノハコ』

採択事業名

2021 年度

社会的孤立を防ぐ居場所事業

2022 年度

社会的養護出身者等の若者に対する伴走支援事業

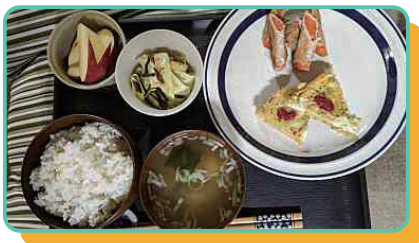
基本情報

🏠 札幌市豊平区平岸3条14丁目1-1 1南平岸ビル 503号室

☎ 090-2814-1975

✉ <https://can-picke.com/contact/>

🌐 <https://can-picke.com>



団体紹介

NPO 法人 CAN は、家族や社会のサポートが見込めずに自立の機会から疎外されている子どもや若者たちを対象に、生活・教育・就職などを支援しています。その活動を通して子どもや若者の困難な現状を社会に発信することで、子どもや若者が自らの力を活かし、尊重されて生きていける地域社会づくりに寄与することを目指しています。

社会的養護の出身者などが気軽に立ち寄れる札幌市内の居場所「ピッケノハコ」を運営しているほか、札幌市内の若年女性支援を行う民間団体ネットワーク（通称 Cloudy）に参画し、定期的に情報交換や研修をしたり、共同での食料配布を行っています。また、札幌市の若年女性支援事業（通称 LINK）の協力団体として、SNS パトロールや繁華街での夜回り活動を通して、若年層にアウトリーチをしています。



Column

ピッケノハコ拡大大作戦

ピッケノハコは、社会的養護の出身者や社会生活に困難を抱えている若い人が安心して気軽に立ち寄り、スタッフに相談したり一休みしたりできる、札幌市内の1DKのアパートを活用した居場所です。以前、CANが運営していた女子向けの自立援助ホーム出身者を継続的に支援するために開設しましたが、今では、男性を含め身近に頼れる人がいない若者たちの居場所になっています。ピッケとは、スタッフの屋代さんが飼っている猫の名前です。ピッケも週に何度か屋代さんと一緒に「ハコ」に出動します。

開設当初は平日のみの開室でしたが、社会的孤立を防ぐには、来やすい環境を整える必要があると考え、助成金を活用してピッケノハコを拡大することにしました。開室時間を増やしたほか、静かなところで休みたい方、緊急シェルターを必要とする方のために近くのアパートにもう一部屋（1DK）を確保し、活用しています。

COVID-19感染拡大期には、一度の来訪人数を調整しながら開室していましたが、2023年秋には、多い時には若者5人、スタッフ3人が一度に集まることもあり、にぎわっています。



屋代さんが飼っている猫のピッケ



Column

若者たちが安心して相談できるところ

ピッケノハコで対面での相談ができなくても、電話やSNSで相談にのるほか、若者がいるところにスタッフが出向くなど、多様な手段で相談にのり、必要に応じて直接支援を行っています。病気で動けないという方の家に食べ物をもって行ったり、掃除を手伝ったり、ひとりで病院に行くエネルギーがない方にスタッフが付き添うこともあります。遠くから札幌に移って来た子が住む場所を確保し、落ち着くまでスタッフが何度も足を運んで支援することもあります。利用者の誕生日には職員の皆さんが手書きで素敵な誕生日カードを作って送ります。困窮しがちな方には食料を送り、コミュニケーションのきっかけになるような工夫も検討しています。

利用者のなかには、相談もないのにピッケノハコに行きづらいと感じている方もいるようで、そんな方でも参加しやすいよう、町のイベントにあわせて外出イベントも企画しています。

貯金がなくなって困窮した時には本人が市役所に行って相談をし、制度利用できればよいのですが、役所での手続きは煩雑で時間がかかると感じている若者にとって市役所は敷居が高く、自力ではなかなか行けないのが実情です。そこで、CANのスタッフが若者と一緒に行政窓口に同行してサポートを行います。

このような関わりを通して、若者たちは、困った状態が深刻化する前にCANのスタッフに相談できるようになるとCANでは

考えています。若者たちがピッケノハコをはじめとした支援機関とつながり続けられるような支援を行っています。

【利用可能時間】

月～金曜日 11:00～17:00

土日祝 14:00～20:00



若い人が安心して気軽に立ち寄り、スタッフに相談したり一休みしたりできる居場所。



Interview

取り組みのなかで大事にしていること

孤立した環境で育ち、限られた経験しかしていない方は一般常識とは違う、その人なりの常識をもっているため、世間一般の常識で見ないようにしています。また、支援される、する、ではなく、フラットな関係で、彼・彼女の情報、知恵、知識に耳を傾け、私たちもあなたたちからたくさん学ぶことがあるよ、ということをお分かしてもらえるようにしています。あと、私たちは彼・彼女の生活全体のほんの一部に関わらせてもらっているだけなので、踏み込みすぎず、侵襲感を与え暴力的環境が再現されないように距離感を大事にして接するようにしています。私たちとの関係ではOKでも、他では被害にあいやすいこともあるため、1対1で向き合う際に、パーソナルスペースを確保できるよう、不用意に近づきすぎないように心掛けています。親しい間柄になりたいという思いは互いに常にあるので、気を付けていないと踏み込みすぎたりしますので、そこは注意しています。



Interview

支援が生かされたと感じるとき

大事なのは、本人が決断をされることなので、心身ともに体調が悪いけれどなかなか病院に行けなかった方が、思い切って通院を始めてみた、病院に行きたいから一緒に行ってほしいなど、フェーズが一段変わるときに、良かったと思いますが、良かったと思える瞬間はなかなかなく、点数がつくわけでもないので、常にこれで良いのかという思いはあります。食欲不振や眠れなかった方が眠れた、食べられたと聞くとよかったですと思いますが、それが続くわけではなく、常に浮き沈みがありますし。それでも、相談して良いのか分からなかった、調べていろいろあることを知っていても、なかなか行けないという方が、ここに来て、しばらくして、サポートステーションに行ってみたと伝えてくれるとCANが踏み台のようになって、小さいけどジャンプできたのかな、良かったなと思います。

担当者インタビュー

若者支援に関わることになったきっかけ・動機

屋代 通子さん

特定非営利活動法人 CAN 理事



CANは2004年に活動を始めましたが、そのころにイギリスでケアリーバー支援を見してきました。

日本でようやく虐待防止法ができて、保護に関してはなんとなく法律が整備されてきたころでした。

虐待を受けた人の人生はそこから始まり、彼らは自分たちの人生を切り開いていかなければならない、親元で育った人はゆっくり社会に出ていけるのに社会的養護で育った人はいきなり社会に放り出され、そこに大きな差があるということに気づきました。日本の支援施策には若者を若者として支援するという発想はないため、放り出される人に何等か力になりたいと思い、電話相談を始めました。社会で起きていることなのに、何も知らなくていいのか、という思いでしたが、知らなかったからこそできたこともあると思っています。



Interview

助成金があったからこそできたこと

スタッフが動けるのは助成金があったからこそですから、助成金がなければハコの運営の継続はできませんでした。もう一か所、居場所を確保してスペースが広がり、感染予防の空気清浄機導入など環境を整備し、体調が悪い人には別室で過ごしてもらうといったような使い方もできて、あなたはそういう状態だから来ないで、と排除せずに、使ってもらえるよう案内できました。コロナで入場制限がつく居場所が多くなる中、朝起きてみないと、その日になってみないと予定を立てられない人のために、門戸を開けておけるのはすごく良かったです。拠点をベースにした若者支援の実績を積んでいき、拠点事業が自治体事業になったときにチャレンジできればと思います。

NPO 法人 CAN 活動内容

スペース『ピッケノハコ』運営

若い方が安心して過ごせる居場所として、基本的に毎日ひらいています。

居場所と一緒に過ごす中で、話してくれたことからくみ取れることがあればくみ取って、一緒に悩み、一緒に考える。本人が望む限りは、関係が切れることなくずっとお付き合いを続けていけることを目指しています。

電話・LINE 相談

ピッケノハコに来られない方へも、電話や LINE で相談を受け付けています。

受付時間はピッケノハコ開所時間と同じです。

社会的養護出身者等への伴走支援

身近に頼れる存在がない、家族などからの支援を受けづらい方へのフォローを行っています。

本人の希望を聞き病院や諸手続きなどの同行支援も行っています。

With コロナにおけるケアリーバーへの伴走型支援事業

特定非営利活動法人

チャイルドラインみやぎ

NPO 法人チャイルドラインみやぎ

採択事業名

2021年度

With コロナにおけるケアリーバーへの伴走型支援事業

基本情報

🏠 宮城県仙台市青葉区川平 1-16-5 スカイハイツ 102

☎ 022-279-7210

✉ info@cl-miyagi.org

🌐 <http://cl-miyagi.org>



団体紹介

チャイルドラインみやぎは、虐待防止を目的にイギリスではじまった子どもの電話相談を日本でも実施しようと、2001年に団体を設立し、現在まで電話相談を実施しています。「子どもがもともと持っている『生きる』力に子ども自身が気づくための支援をすること、子どもの声に耳を傾けることの重要性について社会的認識を高めること、子どもの人権を守る社会基盤作りに寄与すること」を目的とし、子どもの権利条約に掲げられている、「子どもが主体」「子どもの最善の利益」を実現する社会を目指しています。そのビジョンの実現のために、これまで、子どもに関わる人材育成、東日本大震災後の子ども支援、宮城県内の子ども関係団体のネットワーク作りに取り組んできました。2016年からは社会的養護の子ども・若者支援に取り組んでいます。



Column

With コロナにおけるケアリーバーへの伴走型支援事業

チャイルドラインみやぎでは、宮城県内の児童養護施設と連携し、退所準備と退所後支援をしています。支援している子ども・若者のなかには、虐待によるトラウマなどで他人とのコミュニケーションが難しく、就職が難しかったり、就職しても数カ月で退職してしまう人も少なくありません。そこに、COVID-19の流行の影響が重なり、心身に不調をきたして退職する人、勤務状況が悪化してしまう人が増えました。また、児童養護施設を退所するときに就労ではなく進学を選択する人が増えました。

そこで、チャイルドラインみやぎでは、当助成を活用して2022年度に「With コロナにおけるケアリーバーへの伴走型支援事業」を実施しました。就労を迫られる若者たちを対象に、それぞれのペースで自己理解やスキルトレーニングができる教材を用意したり、自身の特性を理解し、それを生かした働き方ができるよう丁寧な就労相談、一人暮らしにむけた生活スキルのトレーニングなど伴走型の就労準備支援を行いました。こうした若者たちに寄り添い、サポートしてくれる多様な人材を地域に増やすためにボランティア育成講座を実施したり、関係づくりのためのイベントを開催したほか、活動を通して見えてきた課題を踏まえ、自治体などに提言を行いました。



Column

里親のもとにいる若者への伴走型の就労準備支援

自立に向けた準備の時期に入っているものの里親のもとで引きこもりがちな若者に対し、一人暮らし体験と職業スキルトレーニングをセットにした支援を行いました。里親から相談を受け、スタッフが家庭訪問をするところから始まったあるケースは、里親のもとを離れるとどんな生活が待っているのか、本人はまだ想像もできない状態からのスタートでした。スタッフによる家庭訪問は、外の風を入れることができたようで、本人の生活と気持ちに変化をもたらしたようでした。

スタッフと本人が直接連絡を取りあって、関係づくりをし、いよいよ仙台の一人暮らし練習用のアパートに1泊2日の宿泊体験をすることになりました。里親宅から仙台までは1時間以上かかる距離で、本人にとっては勇気のいる一歩だったはずですが、週1回のペースで仙台に来て宿泊体験を継続していきました。

1日目には、買い物や炊事、洗濯など、一人暮らしの日常生活やアパート契約の手続きなどについて学びます。食事のメニューを考えながらスタッフと一緒に買い物に行きました。晩ごはんだけでなく、翌日の朝ごはん、2日目のトレーニングに参加するためのお弁当のことも考えなければなりません。ス

タッフと話しながら、いろいろ考えて買い物をしました。里親家庭は大きな施設とちがって、日常の家事の切り盛りが身近なところにあるとはいえ、自分ですべてやってみる経験は自立訓練としてとても大事です。

2日目はチャイルドラインの拠点に行きパソコンスキルを学ぶトレーニングを受けたり、他団体が軽作業を行う就労訓練に参加してもらいました。他団体と連携しての就労訓練プログラムは、いつもとは違う人との出会いもあり、対人関係のトレーニングにもなります。このケースでは数カ月継続して宿泊体験に参加し、経験を積むことができました。

このような自立生活訓練を含む就労準備支援は、人によって一進一退のプロセスをたどることもありますが、このようなチャレンジを通して、伴走支援をするスタッフとの信頼関係が作れるのもとても大事なことです。今回の事業をとおして丁寧な伴走型の支援をすることができ、今後のモデルとなり得る事例を得ることができました。その一方で、アパートでの宿泊体験や軽作業をクリアした後の自立生活支援にあたってつなげる外部団体との連携の難しさ、そのリソースの少なさを感じています。



Column

防災グッズのプレゼント

宮城県では、2011年に東日本大震災に見舞われ、今年18歳で措置解除になる子どもたちの中には当時7歳くらいで被災した子、親をなくした子もいます。最近でも地震が起きると過呼吸になる子などいても、ひとり暮らしになる前に防災グッズを準備して、いざというときに備えてもらうという支援を考え、ひとり立ちのプレゼントに選びました。事前に申し込みをもらい、イベントの際に取りに来てもらうなど、アフターケアにつながる工夫もしたところ、施設職員などからも感謝されました。



Column

関係づくりのきっかけとなるイベント開催

チャイルドラインみやぎでは、就労準備や退所後生活をテーマにした講座を児童養護施設に出向いて実施しています。こうした講座に参加する子たちと顔をつなぎ、関係づくりをして、退所後支援につなげています。施設や里親のもとを離れたあと、困ったときに、相談に来やすい関係を就労訓練期間に築くことを大事にしています。

2023年1月に実施したイベントでは、地域の様々な方に協力してもらい、フリーマーケットに出すような洋服を買えるコーナーやお金をかけずにできるネイルアートを教えてもらえるコーナーは大人気でした。参加した子たちは入り口で仮想通貨を受け取り、イベント会場でそれを自由に使って洋服を買ったりして楽しみました。里親に付き添ってもらってきた子たちもおり、相談の場面ではみられない親子の姿に触れることができました。来場者に困ったときの連絡先が書いてある「情報カード」を配布し、退所したあとにも頼れるところがあることを直接、伝えることができました。

また、この事業で実施したボランティア養成講座に参加した方々にこのイベントの手伝いを担当してもらい、実際の支援に向けた実習の機会にも、また、こども・若者たちとの関係づくりの機会にもなりました。

(写真) イベントで来場した里子のお子さんに、講師の方がネイルアートをしてくださった際の写真。自分で色を選んで、好きな飾りをつけてもらったことで、大変喜んでいました



Interview

取り組みのなかで大事にしていること

否定したりせずに、まずはその人の気持ちを聞くことを一番大事にしています。あいまいな言葉の中から気持ちを汲み取るのなかなか難しくなったりするのですが、こちら側が、聞くよ、という姿勢でお話をすると、相手の気持ちもほぐれてきて、実はそういう気持ちなんだというのがわかってきます。気持ちがよくわからない時には、それってこういう感じかな、こうかな、と示したり、その子が話しているのだなという所まで聞いていく、沈黙していても話したくなるまで待ったり、その子のその時の気持ちに沿っていく形で聞いていきます。時には、「私はこう思うけどあなたはこう思っているの?」と、支援者がまず自分の思いを伝えることもあります。気持ちを言葉にするっていうのは本当に難しい。それをわかった上で、待つことと、この捉え方であるのかどうか本人に確認しながら対話することを心掛けています。



Interview

支援が活かされたと感じるとき

この助成金で主に関わってきた女性は、人とコミュニケーションをとるのが難しく、他とのかかわりが少ない中で、ここに来る一歩を踏み出すことも大変だったことと思います。ここまで一年半、継続してこられたのは支援する私たちみんなが関わる「チーム」を組んできた成果だと思っています。支援者一人で対象者と向き合い続けるのは難しく、チーム内でいろいろな視点や角度からの助言があることで関わり続けられました。本人が自立をして外に出るとき、私たちと関わりを切らしてしまうと孤立してしまうということがないように、他の支援にも繋げられるように上手に渡していけるよう、チームメンバーで努力しています。支援者はお守りのな役割であり、お守りは一個でなくいろいろなところにある方が、本人が生きやすくなると思います。



Interview

助成金があったからこそできたこと

運営に携わる3名の方々からコメントをいただきました。

小林さん：

これまで宿泊体験や就労準備ができる場所の家賃を自分たちで払うことが難しかったのですが、助成金によって通年で場所を確保することができました。また、助成金のシステムに則って検証することで、通常自団地でやっている運営や経理なども改めて見直すことができ、何が足りなくて、何がうまくいっているのが明確になり、振り返るきっかけになりました。企画や事務作業など、職員は負担と思ったこともあったでしょうが、そこを乗り越えて、ステップアップしてもらいたい気持ちが代表としてはあったので、このような機会を与えていただきありがたかったです。

藤石さん：

休眠預金助成を使うということで、通帳管理や経理など、これまでなかったことで、神経を使いましたが、勉強になりました。事業運用面では、助成金を使わせてもらったことで、本人の成長につながる支援ができたのではないかと思います。また、助成金で里親や施設の子向けのイベントを非公開で行い、施設職員や里親など付き添いの方も来てくださって好評でした。そこでは仮想通貨のようなものを用意して寄付された物資や洋服の中から好きなものを持っていけたり、ネイルアートが体験できるコーナーがあったりして、女の子たちがとても喜んでくれました。準備も含めて人材育成事業で育った方達がのべ30人くらい手伝ってくれて、コロナで少なくなっていたボランティアとの交流ができたり、理事の教え子である心理系の大学生が4人くらい来てくれ、子どもたちやお母さんたちの悩みを聞くなど、現場で直接学ぶ良い機会が提供できました。

米山さん：

経理を担当したばかりだったのですが、お金の流れがわかるようになりました。また、支援している子が定期的に来たり、連絡もとれるようになり、良い経験をして自立に向けて進んでいけるようになって良かったなあと思います。イベントでは、不安そうな顔をしていた里親さんが「楽しかったです」とアンケートに書いてくださったり、里子さんとの関係性、普段どういう風と一緒に生活されているのかがなんとなく分かり、それも良かったです。

担当者インタビュー

若者支援に関わることになったきっかけ・動機

藤石 伸子さん

NPO 法人チャイルドラインみやぎ事務局



もともと保育園で補助をされていて未来のある子どもたちに少しでも関わりながら、自分も楽しみたいという思いでした。若者支援は難しそうだという思いもありましたが、CLみやぎで震災を機に設置した託児室でコーディネーターとして仕事をすることになり、その後、団体が仙台市と宮城県からアフターケア事業の委託を受けたことがきっかけで若者支援に関わることになりました。震災が発生し、支援の要請を受けて、CLみやぎで一時的に託児室を作り、そこで、お子さんに関わっていて、特に障害をもっているお子さんとの関わり方を学びました。どんなに小さくてもしっかり寄り添っていくと、「この子は暴れるんだよ」といわれている子でも意思疎通できるようになるのです。若者支援では電話相談を受けたりするので研修もあるのですが、その研修や託児室での学びからこの方は障がいがあるのか、など相手の様子や気持ちを考えながら話ができるようになりました。

困りきってしまう前に相談してもらいたい！「つながるアウトリーチ」にチャレンジ



NPO 法人どりいむスイッチ 退所児童等アフターケア事業所カモミール

採択事業名

2021年度

つながるアウトリーチ強化プロジェクト

2022年度

つながるアウトリーチ強化プロジェクト

基本情報

🏠 広島県福山市霞町一丁目8番15号 霞町ビル2階

☎ 084-971-4865

✉ info@dreamswitch.org

🌐 <https://dreamswitch.or.jp>



団体紹介

どりいむスイッチは、社会参加に困難をかかえる子どもと若者とその家族が、主体的に幸せに生きていくことに貢献するため、専門性をもって関わり、社会へのかけ橋となることをミッションとして、広島県福山市を拠点に活動しています。設立当初から在宅ワーク支援や若者サポートステーションなど就労を通じた社会参加支援をしてきました。2016年から、社会的養護を巣立った子ども・若者たちが仕事や、大学・専門学校などへの通学を続けることができ、地域社会で自立した生活ができるようになるよう、退所前の就労準備支援、退所時のつながりづくり、退所後の個別支援などを実施しています。そのほか、こうした若者たちの居住のニーズに対応するため、2022年度からは自立援助ホームも運営しています。



Column

つながるアウトリーチ強化プロジェクト

若者たちの支援を続けるなか、COVID-19の影響でメンタル不調になってしまう方がいたり、就労が以前にも増して難しい状況が広がり、また、行動制限によって相談に来にくくなるといった状況をカモミールでは深刻に受け止めていました。このような状態を打開するためには、「会いに行く支援」「困る前からの支援」を早急に、今より多くの若者へ届ける必要があると考え、カモミールでは「つながるアウトリーチ」を企画しました。2021年度から当助成金を活用して実施しているこの事業の内容は大きく3つ、つながるための周知活動、継続的なアウトリーチ、体制づくりがあります。



Column

つながるための周知活動

若者たちとカモミールのスタッフがつながるために、若者がアクセスしやすいLINEの公式サイトを開設し、LINE相談カードをつくって、様々な機会をとらえて配布しています。

地域の支援機関の方にもカモミールの取り組みについて知ってもらい、伴走支援が必要な若者がいた時につないでもらえるよう、機関訪問や学習会などを企画しています。子ども・若者支援のなかでも社会的養護はあまり知られておらず、さらに施設を退所したケアリーパー支援となると理解してくれている人は多くありません。役所の社会的養護自立支援の担当の方も人事異動で交代するので、毎年、話をしに行きます。

また、カモミールの職員と地域の児童養護施設の職員が信頼関係を築くことで、子ども・若者たちとカモミールの職員がつながれるので、アウトリーチ勉強会を企画して、支援者同士が共に学ぶ中で、そうした関係づくりを行っています。



Column

継続的なアウトリーチ

つながった若者と信頼関係を構築するために、カモミールでは定期的にお弁当を作ってお家まで持っていき、手渡し活動をしています。福山から離れたところに住んでいる方たちには食料を送付しています。食べ物を届ける活動は、「何が欲しい?」とか「ありがとう」など、LINEでコミュニケーションをとるきっかけにもなりやすく、つながり続けるための仕組みとしてとても有効です。そうしてつながることができた若者たちがサポートを必要としている時にはあれこれ手を尽くして対応します。例えば、住むところがなくなってしまった友達を自分の家に泊めてあげたところだんだん自分が居づらくなってしまったと相談してきた子には、ひとまずビジネスホテルを確保して保護し、それぞれの居所を整える緊急支援を行いました。自殺をほのめかす連絡をしてきた子がいたときは、訪問して話を聞き、必要な支援を行いました。一度、遠方に就職して送り出した子が戻ってくると連絡をくれたときには、住居の確保や仕事探などのサポートをしました。ブラックな職場で危険な怖い目にあわされている若者を救出しなければならぬ時もありました。

若者たちが闇バイトの類に引き寄せられて行ってしまう前に、一人で困りきってどうしようもなくなってしまう前に、カモミールにつながってもらい、生活を整えられるように、継続的なアウトリーチに力を入れています。

カモミールでは一時保護を解除されて家庭復帰した子どもとその家族にも定期的に食料をもって訪問し、見守り支援をしています。ある時、その子どもたちから、お母さんが何日も帰ってこない連絡がありました。スタッフはその家に駆け付けて状況を把握し、子どもたちの安全を確保できるように関係機関に連絡するなど、緊急の対応をしました。



Column

広い広島県のどのエリアにもアウトリーチしたい

2022年度は広島県から退所後の生活相談支援事業を受託できたことで、これまでリーチできていなかった広島県の西部にも支援の範囲を広げることになりました。若者が広島県のどのエリアに住んでいても支援を受けることができることを目指しています。ここで見てきた課題は、福山から電車や車で2時間もかかるところにいる若者たちをどうやって支援するか、ということです。そこで、2023年度は広域の支援体制づくりに力を入れました。



Column

つながるアウトリーチのための体制づくり

若者が困ったときに支援できるようにするには、カモミールの専門職による支援だけでなく、ボランティアの力も借りていくとよいのではないかと考え、カモミールではボランティア養成を行い、「カモミールサポーター」と呼ばれるボランティアそれぞれの希望や特技などを聞いて、それぞれに合わせた関わり方ができるよう、調整をしています。お弁当作りや、スタッフと一緒に弁当を届けに行く活動を通して、「カモミールサポーター」と若者が直接会う機会をつくり、関係構築を図れるようにしています。「カモミールサポーター」と若者の相性も考えながらマッチングをしています。

また、県西部の方は、カモミールのスタッフが頻繁に行けないため、「カモミールサポーター」の役割も少し違ってきます。専門機関の職員などが「カモミールサポーター」となり、カモミールスタッフと連携しながら若者たちの相談、支援にたずさわってくださっています。こうした新たな体制づくりは、勉強会やボランティア講座などでの出会いと対話の中でしか進展しない取り組みで、地道な関係づくりがとても大事です。

このように、若者支援はカモミールと多様な機関が、その時々で必要に応じて連携して行うことが必要であるため、支援者ネットワークの構築にも取り組んでいます。



Interview

取り組みのなかで大事にしていること

カモミールへ来た方は言葉にしていけないことに難しさを抱えている方が多いので、言葉一つ一つを一緒に考えていって悩みを発信するために「言葉化」することを大事にしています。それと、若者は悩みを相談したいとは言って来ないけれど、ソファに寝ころびながら、雑談とかしているようなゆるやかな関係性の中で話をしていると、ふと困ったことが出てくるので、その前段階から緩やかな関係性をしっかり作っておくこと、また、ここに来る子ばかりではないので困る前からつながっておくことが大事だと思います。助成金でできるようになった食糧を渡す活動は、顔を合わせてコミュニケーションを取る機会として繋がりをつくるのに有益で、継続できていますし、これをきっかけに遠方の子ともつながれるようになりました。雑談の中で一緒に問題を探していくコミュニケーション、身構えない接し方を心掛けています。



Interview

支援が活かされたと感じるとき

シェアハウスにきている子で仕事することが難しく、貯金を切り崩して生活していたので支援者側が心配で焦っていたりしましたが、そこはこらえて、その子の話したいことを1時間ずっと聞き、そのあとに仕事の話、ということをして1年間続けたら、本人がそろそろやらないかかな、という気持ちになり、自分で応募してホームセンターでのバイトを見つけてきた時には皆で喜び祝福しました。そのバイトを1年間続けていて、副業もでき、自活できるかというレベルにもなって、それがひとつ実を結んだことかなと思います。カモミールがなんでも聞いてくれたことが結構大事だった、と本人も話しています。



Interview

助成金があったからこそできたこと

運営に携わる2名の方々からコメントをいただきました。

粟木原さん：

前年度から引き続きやってきて食料支援を通してできたつながりを維持でき、拡大することができたのが大きな成果です。利用者とのつながりはもちろんのこと、児童養護施設とのつながりもでき、連携した支援がしやすくなりました。また、ボランティアの方にも継続してお弁当づくりと配布に関わってもらえるようになったり、サポーター養成ができて前はどうかと話していた、遠方の支援の足掛かりもできてきました。サポーターと連携しての取り組みをしっかりと運用するのは来年度かと思います。食を通じて支援者も施設もサポーターともつながり続けていくことで、ケアリーバーを支えていく今後の方向性も見えてきました。

高森さん：

食料支援はいろんな方とつながるとてもよいきっかけになりました。退所者に「食料要りませんか」ということができ、とても反応がよくて、施設の先生からも、退所者にとても喜んでもらえるので好評といわれています。食べ物なので、「〇〇はいらない」とか「△△が欲しい」と会話も広がる良いツールとなり、食料品って大事だなと思いました。

担当者インタビュー

若者支援に関わることになったきっかけ・動機



粟木原 薫さん

特定非営利活動法人どりいむスイッチ

10年ほど前、引きこもり当事者としてどりいむスイッチに相談に来ていました。その経緯で、ボランティアや、他で仕事をしていたのですが、どりいむスイッチの引きこもりがちな若者の居場所支援に関わるようになったのがひとつのきっかけとなりました。そこで、まだ自信がない、社会にできることが難しい若者のパソコンの勉強やイベント開催、遊びに行ったりする当事者活動のサポートや相談をする中で、若者が主体性をもって自分の人生を決定できるというのはとても大事だと感じ、それは今でも変わらずに、本人の思い、主体性に沿って支援していくことを大切にしています。引きこもりの子どもと違って、社会的養護下の子どもたちにはその背景にある社会的課題はありますが、信頼できる大人、居場所を求めていることには違いがないと思っています。



久住 祐香さん

特定非営利活動法人どりいむスイッチ

大学生の時にキャンプ場で小学校高学年から中高校生と一緒にキャンプをする野外活動支援をしていて、そこは多くの大学生ボランティアや子どもたちが居て、自分を成長させてくれる活動でした。その経験を通じて、何か夢中になれることがあって、みんなで切磋琢磨したり、子どもたちに学んでほしいことを考えたりすることが大事だと思い、それを仕事にしたいと京都のユースセンターで働き始めました。元は元気な若者がもっと元気に成長できるという分野に興味がありましたが、若者の居場所では、非行少年やコミュニケーションが苦手な若者など、いろんなタイプの若者に出会い、スポーツ、居場所プログラム、就労体験など、いろんなツールで若者と関わることになりました。ケアリーバーと関わるプログラムもあり、施設にいる、施設を出た、という若者とも出会い、自分自身の価値観も広がりました。色々な背景を持つ、色々な年代の若者がまじりあう場をつくっていききたい、という思いでどりいむスイッチに居ます。

食料支援を入り口に、自分らしく生きるためのサポートを通して築くつながり



NPO 法人日向ぼっこ

採択事業名

2022 年度

精神的つながり構築のための食料等送付事業
—自分らしく生きるためのサポートを通して築くつながり

基本情報

🏠 東京都新宿区下落合 1-3-16 ジョリーメゾンヌベル下落合 202 号室

☎ 03-5834-7433

✉ info@hinatabokko2006.com

🌐 <https://hinatabokko2006.com>



団体紹介

日向ぼっこは、社会的養護の当事者主体の勉強会からスタートした団体で、2007年に社会的養護のもとで生活した人たちが気軽に集える居場所「日向ぼっこサロン」を開設しました。以来、こうした若者たちが安心・安全に過ごせる居場所事業、サロンへの来館、電話、メール、SNS等を通じて様々な方から相談を受け、それぞれの方に寄り添いながら一緒に考える相談事業、来館された方々の声を集約し社会に発信する発信事業の3つを柱に取り組んでいます。様々な背景をもった方々が関わり合い、互いの立場の理解を深め、他者の立場を尊重する機会や場になることを目指し、また、「多様性が尊重される社会の実現」を目指して日向ぼっこは活動しています。



Column

気ままに過ごせる都心の居場所

日向ぼっこは新宿区内の駅近のマンションを事業拠点として活動し、水曜、土曜以外の週5日、午後の時間帯に開館し、相談事業、居場所事業、情報発信事業を行っています。日中仕事がある方でも相談できるよう、火曜日は20時まで開館しています。活動の中心は居場所事業で、週3回、各3時間を予約制のサロンの時間としています。サロンに来る若者はお菓子や軽食などを食べながら、普段の生活のことや、自分自身が感じていることなどを話したり、一人で読書をしたり、楽器を弾いたり、ゲームをするなど自由に過ごしています。月1回程度「お出かけサロン」として、外部での活動も実施しています。内容はスポーツ施設に行ったり、美術館に行くなど、来館者の方のご希望をうかがいながら決めています。

また、人に聞かれたくない悩みや相談があれば、個別に話をする時間を設けています。

また、毎月テーマを設定してオンライン勉強会を実施しています。多様な方々に参加してもらい、それぞれの違う立場からの考えや意見を交換してもらうことを目的としているため、講師を招いての講義形式で行うこともありますが、基本的には、フリートークのような形で行っています。

居場所の安心・安全を担保するため、初めて日向ぼっこを利用する方には、必ず事前に個別面談をするようにしています。

設立当初からの若者たちとの関わりが認められ、2008年から日向ぼっこは東京都から「ふらっとホーム事業」という社会的養護退所者アフターケア事業を受託しています。



Column

窮状に追い込まれやすい若者たち

日向ぼっこでサポートしている若者たちの多くは親に頼ることができないなか、若くして自立することを迫られています。飲食店でのアルバイトや派遣の仕事などに就いていて、収入が不安定です。そこに4年に及んだCOVID-19と物価高騰で、若者たちの生活不安は高まりました。アルバイトが減ってしまったり、失業してしまったりして先行きが見えず、経済的困窮に加え、相談できる場所にアクセスしにくくなったストレスや不安が、いっそう彼らを窮状に追い込みました。





Column

関係性づくりのきっかけとしての食料送付

そこで、困窮状態にある方々と継続的なつながりを構築し、必要なサポートが必要な方に必要な時に届くようにするために、関係性づくりのきっかけとして、お米や乾麺といった主食を中心とした食料を毎月送付する取り組みを、当助成金を得て実施することにしました。食料送付の際、メッセージや情報を手書きしたカードを同封しています。

当助成金を用いた食料を送付する取り組みを、東京都内をはじめとする、これまでかわりのあった全国の児童養護施設にも案内し、サポートが必要と思う退所者への食料送付依頼を受けています。それにより、施設職員は退所した子たちとコミュニケーションをとる機会を作ることができ、食料を受け取った若者は同封されている日向ぼっこからの手紙や情報を見て、日向ぼっこことつながりもできます。

また、若者たちは生活が不安定なため、居所が変わることがよくあります。すると、宅急便業者から、荷物が不達で保管期限が来ているとの連絡が日向ぼっこに入ります。日向ぼっこから施設にその旨を連絡すると、施設の方ですでに把握できている場合もあれば、これを機に居所確認と様子の把握に動くこともあります。このように食料送付の取り組みは、日向ぼっここと若者、施設職員と若者だけでなく、日向ぼっここと施設職員をも結び付けるとも良いチャンネルになっています。

更に、食料を送付するという形のかかわりにおいて、見逃してはならないことがあります。それは「侵襲性」の問題です。こちらから食料を送付する場合、送付者が受け取る側の生活圏に入っていくことはなく、配達業者が持って行くだけです。この時点でのかかわりは間接的。そして、受け取る側には送られてきた食料を受け取る義務はないし、不要になったり、受け取りたくない理由ができた場合は、受け取りを拒否するか無視すればよい。つまり、受け取る側に、かかわりをつくるかどうかの選択の自由があり、かかわることを強制されることはないし、かかわりができたとしても、いつでも切ることができます。「支援」と称して行われる活動の「侵襲性」の問題は、福祉の領域においては、見逃されがちです。生活圏を脅かすことは、たとえ「支援」というかかわりであっても許されないと日向ぼっこでは考えています。生活圏の安全が保障されて、自分自身で選択できるということは、人が主体的に生きるうえで極めて重要なことです。

これまでの活動経験から、このようなつながりが本当の意味での精神的サポートやストレス軽減になるまでにはある程度時間がかかると日向ぼっこでは感じています。そのため、一人の方に対して1年間毎月、食料を継続的に送付しています。2023年度は当助成金を用いて毎月24の方に食料を送ることができました。些細な関わりでも継続的に行うことで、彼らとの間に様々なつながりを構築することができ、彼らが問題を抱えたときに、一人で抱え込むことなく、また、問題がない時でも孤独やさみしさを感じることなく連絡をしてもらえることを待っています。





Interview

取り組みのなかで大事にしていること

- ① ご本人の意思を尊重する
- ② 一人で抱え込んで思い悩まないように支援する

この2つを大事にして活動をしています。

①については、活動する中で措置開始、措置解除の時、自分の身に何が起きているのかを子どもでもわかるように説明されていなかったり、自分の意見を聞いてもらえなかった、突然学校にきて連れ去られ、怖かった、というような話をよく聞きました。施設に入ってからも、児相担当者に連絡がつかない、担当者が変わってしまったなどで、意見を聞いてもらえず、自分の気持ちを表す場面がなかったり、措置解除にあたっては、進学したいのに就職させられた、とよく聞きます。本人の意見を尊重することは、相手が子どもであるとか大人であるとか、社会的養護の当事者かどうかに限った事ではなく、人のかかわりの中で当たり前のことです。ただ、このことは本人の言いなりになるということでは決してなく、本人の人生なので、その意思は尊重されるべきなのです。

②については、子どもと関わる中で、人に迷惑をかけたくない、相談するところがない、と1人で抱え込んでしまうことが多く、もっと早い時期に関わっていれば、複雑にならなくて済んだのにな、と思うことが多く、そうならないような関係性づくりを大事にしています。

また、このことは、スタッフにおいても言えます。そのため、日向ぼっこでは、カンファレンスや情報共有を大切に、すべてのことは原則、合議制で決めています。



Interview

「かかわり」が活かされたと感じるとき

自分の気持ちや意志を伝えることができず、あの時ああ言っていれば、伝わっていればどうだったのだろう、とその後ずっと抱えていく子は多いです。一方で、かかわったけれどもその方たちのその後の状況に大きな変化がないことも多いです。しかし、状況が同じだとしても、自分の気持ちを表現できた、伝えることは伝えられた、と感じ、それで本人が少しでも「良かった」と思ってくれた時に良かったと思います。例えば、進学したいのに就職させられちゃったという子が、やっぱり進学したいということで相談にきたので、受験にチャレンジすることにしたところ、結果的に進学自体はうまくいかなかったけれども、受験勉強をするなか、本当は進学したいわけではないけど、進学させてもらえなかったことでそこにこだわっていたんだな、と気づき、進学ではなく仕事を探すという違う生き方を選べるようになったり……。居場所ですべて話を聞き、少しずつ距離を縮めながら、本人が本当の気持ちを話せるようになることを意識して関わってきたことで、子ども自身が本当は何をしたかったのかを考えられるようになる、と気づきました。自分の気持ちに気づいて、自分で自分の人生について決められると、先は大変だけど、同じことで思い悩むことはあまりないように思います。



Interview

助成金があったからこそできたこと

休眠預金の助成を受けて多くの方に食料を送ることができるようになりました。食料やメッセージ送付は大変でしたが、なかなかコンタクトしてくれない人が多い中、食料を送ることでつながるきっかけになった方がいます。きっかけ作りは難しいですが、きっかけを作らないことには、知り合うこともないので、関係作りにつながりません。また、食料を送ることで施設との関係が強くなり、連絡も取りやすくなりました。

食料を送った9施設、9人からありがとうと手書きのメッセージをもらえてびっくりしました。先日は2年前に食料を送った子どもから相談の連絡をいただき、来館してくれました。その際「いつも手書きでくれたメッセージカードがうれしくて、今でも全部取ってある」と言ってくれました。どこかで心にとめてくれていると思えました。かかわり方は、いろいろな形がありますが、多くの方と関係性をつくる場面で助成金が生きています。